

ればならないのは、医師の指示と業務上の指揮命令系統の関係である。とりわけ、医師と看護婦との関係については、総婦長制度がとられる場合、その関係がどうもはっきり理解されないことが多いように思われる。そこでは、看護婦は総婦長の指揮命令下において、その下命をうけて医師の指示に従うのであるが、特に医師の側からはその関係が了解されがたいようである。それが病院運営上に円滑を欠く一因になっている場合も多い。いづれにしても、病院の管理組織は事柄として非常にわかりにくい一面があり、まだ明確な結論が出ていないというのが実状であって、今後の研究の推進が望まれる。

4.5 病院組織の有機体的精密化

この問題は病院運営の万全を期するためには最も重要な根本的な問題であるが、すでに与えられた紙数も尽きたので、いづれ他日、稿を改めて述べることにしたい。

なお、病院管理の問題として次の事項も述べたかったが、その暇がないので、以下その項目だけを挙げておく。

5. 病院の機能性と経済性

6. 業務管理

6.1 仕事の改善

6.2 人事管理

7. 病院の今後と管理のあり方

(虎の門病院事務部長)

編集デスク <19>

東京の文京・駒込千駄木町にある旧漱石居住の家が東京都の文化史跡としての指定を解除されて原形が消滅するというので、文化人の間にいろいろの論議を呼んでいる。

漱石が、「吾輩は猫である」を書いたこの旧居は、その前に鷗外も住んだこともあるので、期せずして、近代日本文学の2文豪が住んだ記念すべき史跡となったのである。もっとも、この家は、漱石の猫の家としては有名であっても、鷗外が上野花園町の第1夫人の家から移って、その後観潮楼に移るまでの間に住んだということはあまり有名ではなかった。一般には猫の家として知られていたのである。鷗外・漱石共に住人だということで興味を寄せるのは、一部の文学愛好者や、鷗外漱石ファンだけであつたかもしれない。

とにかく、木造かわらぶきのこの家はいたんでしまつて、とても家屋としての使用にたえないし、さりとて、史跡として指定はされても、都

から補修の費用が出るわけではないから、この家の持主は、ついにとりこわしを決意して、指定の解除を申請し、都の方も、何もめんどろを見てもやれなかったし、今後も何もしてもやれないということでついに指定を解除することになったということである。

昨年、私がフランクフルトの国際書籍展に行った時、フランクフルトを生誕地とした世界的文豪ゲーテの家が原型のまま保存されているのを見ていろいろ考えさせられることが多かった。このゲーテの家は今度の

食うや食わずの裡には文化は育たないのである。敗戦のドイツは、その中であっても、ゲーテの家を保存し続けた。そのような余裕は、国家と民族の実力を示すものであると共に、今後の国家と民族の隆昌をもたらしめるものであろう。

日本の家屋は木造だから、保存には適しない。いかに保全につとめても命数尽きる。原型のままで後代に伝えることは困難である。そのことは、猫の家ばかりではない。木造の家はまだよいかもしれない。紙である近代文学の本などは散いつし消し去られて容易に手に入らなくなってゆく。近代日本文学館の建設が高見順を理事長にスタートする体制がようやくできあがったのは、あまりに安易に文化財が失われてゆくの惜しんでのことである。先日の評議員会に私も出たが、ことはまだ序の口で、これから多くの難問を解決してゆかなければならない。

本も然り、もっと耐久性のある家とても然り。とにかく日本の経済と文化の底の浅さを感じることに痛切である。ゲーテの家のことと対比すると、その感はずらに深い。

（鷗外・漱石の家）

——長谷川 泉——

戦争で爆撃を受けて破壊されたのだが、その破片も集めて原型のままに補修された。疎開されていた調度は平和がよみがえった今日再びこの家にその所を得て、文豪の生活をしのばせると共に、次代の人たちに、民族文化の遺産を考え、将来のはげみになるようなあるものを与え続けている。精神文化は高貴なるものは、余裕のないところには生まれにくい。